

＜スタッフ紹介＞

役 職	スタッフ名
部長 兼周産期センター新生児医療センター長	山本 昌周
医 長	立石 美穂
医 長	三原 聖子
非常勤医員	住田 裕
非常勤医員	辻田 麻友子
非常勤医員	田上 利樹

＜特色と概要＞

2024年度診療スタッフは、2024年1月に医員1名退職後人員補充なく、小児科専攻医1名を新規採用し、常勤医3名、非常勤医3名の計6名で運営を開始した。日本小児科学会の小児科専攻医研修制度変更後8年目となるが、2年ぶりに専攻医1名を新規採用した。

当科は、基幹病院である大阪大学小児科の関連施設であり、小児科専攻医(初期研修2年を終えた卒後3年目以降の小児科専門医取得を希望する研修医)が基幹病院研修プログラムに沿って研修を進める過程で協力する補完施設という位置付けである。

近年は、大阪大学小児科専攻医研修プログラムへの応募人員が減少しており、基幹病院での施設内研修を優先するため、当科への専攻医派遣は見送られる傾向が続いている。大阪大学の立地が北摂地域であり、泉州南部地域に立地する当科を研修先として希望する専攻医が少なく、地理的なデメリットを打破すべく、2019年度より大阪公立大学小児科専攻医研修プログラムにも参加しているが、思うように専攻医採用は進んでいない。

小児科外来診療において、人員減、働き方改革による時間外勤務制限の影響で、午前一般診は月曜～金曜までの3診体制は維持不可となり、午後の時間外外来紹介、救急搬送にも不応需とならざるを得ない日程が増え、地域小児医療への貢献を減じる結果となってしまう。これを打開すべく2024年10月より小児専門医1名、小児神経専門医1名を新たに応援医師として中途採用し、午前3診体制、神経外来再開を図った。また、午後診療は、各担当医による慢性外来、専門外来である循環器外来(第2金曜予約制)、1ヶ月及び生後2週健診、予防接種外来を行っている。RSウイルス流行期間中(2024～2025年シーズンは当センターでは3月から7月までを設定)第1、3金曜日にハイリスク児に対して抗RSウイルスモノクローナル抗体として従来のシナジスに加えて長期作用型製剤であるベイフォータスを投与している。又、当院NICUを退院した超低出生体重児を対象に臨床心理士による新版K式発達検査を泉佐野市子育て支援課のご協力により、定期的に継続している。

泉州南部二次医療圏内の小児救急医療体制における当科の役割は、2006年11月開設の一次救急診療広域セン

ターである泉州北部小児初期救急広域センターへの出務(年4～5回)、2014年4月移転の泉州南部小児初期急病センター(旧泉佐野・熊取・田尻休日診療所)への出務(毎月2～3回)、二次救急輪番体制を構築する各地域病院(和泉市立総合医療センター、泉大津市立病院、市立岸和田市民病院、岸和田徳洲会病院、市立貝塚病院、りんくう総合医療センター、阪南市民病院)に参加することで間断のない小児救急診療連携に携わっている。2022年度より大阪母子医療センター救急科が新たに泉州南部小児救急輪番体制に加わり、当科の担当は月2回から月1回に軽減した。しかしながら、各輪番担当病院小児科人員減少、地域開業小児科医減少により、小児救急医療体制維持が年々困難となっており、泉州地域小児救急医療体制の再構築を考慮するべきとの意見が高まり、2022年度末より各輪番担当病院による泉州小児救急輪番体制運営委員会が発足、各自自治母子保健グループ担当及び大阪府地域保健課母子グループ担当も加わり、定期的に議論を重ねている。

地域小児保健業務への貢献として、市町村乳幼児健診に積極的に出務しており、泉佐野市4ヶ月児健診に年12回、熊取町4ヶ月児健診に年6回、同町1才半健診に年4回、泉南市二次健診に年6回出務している。2023年度に一旦派遣中止となっていた田尻町5ヶ月児健診及び泉南市4ヶ月児健診へも派遣再開となった。市町村乳幼児二次健診への従事医師不足解消策の一環として、2016年4月より合同二次健診(すこやか健診)を開始している。泉佐野市、泉南市、熊取町、田尻町の2市2町に居住する二次健診対象者を、りんくう総合医療センター隣接の健診会場(教育研修棟2階サザンウィズ)に集め、医師3名(当科より2名、医師会より1名)、地域保健師、助産師、看護師、栄養士、当院事務担当の協力を得て、月1回行っている。

当センター出生児を対象に定期接種、任意接種を行っている。定期接種委託契約は貝塚市、泉佐野市、泉南市、熊取町、田尻町、阪南市、岬町である。BCG、子宮頸がんワクチン及び3歳以上の定期接種は対象外としている。

以上、当院小児科は院内診療業務に留まらず、地域小児医療・地域小児保健事業にも活動の幅を広げている。

＜実績＞

新型コロナウイルス禍がようやく落ち着き、市民の社会活動及び経済活動がコロナ禍以前のレベルまで復活したと言って良い状況であるが、2024年度実績は、外来・入院ともに患者数はコロナ禍極期である2020、2021年度を境に徐々に回復したものの、2023年度とほぼ同等であった。

小児外来診療においては、年間外来受診延べ患者数(生後2週健診、1ヶ月健診、予防接種を含む)は8,745人(輪番救急外来受診患者を除く)、月平均729人で、コロナ

禍前年2019年度の延べ受診患者数11,299人、月平均約940人に比べ、23%減少まで回復、コロナ禍4年目の2023年度の延べ受診患者数8,689人、月平均724人とほぼ同等で、コロナ禍数年間というごく短期間に小児人口減少が急激に進んでいる影響が考えられた。

小児救急診療においては、コロナ禍中の2022年度より泉州南部小児救急輪番担当回数が月2回から月1回と半減した。2024年度は191人と、2023年度185人から、2023年度比で3%増加になった。(表1)

小児入院診療については、一般小児入院患者数は延べ124人、2023年度115人に対しては7.8%増加となった。小児救急輪番経由の入院児数は15人で、2023年度8人に対しては88%増加した。小児救急輪番経由の入院児数が延べ入院患者数に占める割合は7.9%(15人/191人)で、2023年度4.3%と10%未満が継続している。

<今年度の反省と来年度への抱負>

小児外来入院診療及び救急診療において、コロナ禍に大きく影響された2020、2021年度から、コロナ禍前の実績に回復する兆しが見えつつあった2022年、2023度を経て、2024年度の外来入院診療実績の回復は限定的であった。コロナ禍前後を通して外来及び入院患者数の回復は認めるものの、2023年度とほぼ同等であった。コロナ禍終息に伴い、保育及び学校環境の復帰、感染予防策緩和、受診控えの減少などにより種々の感染症罹患率がコロナ禍前に

ほぼ復帰した一方で、出生数減少を背景にした地域小児人口減少や定期接種の漸次拡大が大きな要因の一つと思われる。しかしながら、今後数年はコロナ禍中に種々の感染症を経験しなかった感受性乳幼児が新たな暴露機会に晒されるなど(一例として、年長児のロタウイルス感染罹患増加、学童の百日咳罹患増加など)、一般小児科診療の中心は従前の急性感染症診療であることには大きく変わらないと思われる。

そのために、当科においては外来診療枠及び救急対応枠を出来るだけ充足し、地域開業小児科とも密接に連携しながら、地域の流行状況に応じて、急性感染性疾患の外来入院診療受入れを充実させていく所存である。

来年度以降の課題として喫緊なのは、常勤医師確保によるマンパワー充足であるが、これまでに当院で専攻医研修を修了、専門医資格を取得、更にsubspecialityを深めた人材に再就職を呼びかけるのが短期的かつ現実的な解決策であろう。彼らが、再び当院での診療業務や後進育成に携わりたいと希望するような魅力ある職場とするには、臨床アクティビティを落とさないこと、学会、研究会、論文等で発信すること、大阪大学及び大阪公立大学小児科専攻医研修プログラムの協力施設の中で、新生児医療と一般小児診療をバランスよく研修できる施設として地道に日々の業務をこなしていくことであろう。

表1 夜間休日小児救急輪番受診児数(2024年度)

	2次救急(17時~23時)	1次救急(23時以降)	計
受診児数	35	156	191
救急車搬送	22	18	40
紹介児数	6	2	8
入院児数	6(17.1%)	9(5.8%)	15(7.9%)

表2 入院児主診断名

01 感染症及び寄生虫症	22	10 呼吸器系の疾患	63	11 消化器系の疾患	2
RSウイルス感染症	10	RSウイルス気管支炎	2	急性虫垂炎	2
アデノウイルス感染症	1	RSウイルス細気管支炎	11	12 皮膚及び皮下組織の疾患	1
ウイルス感染症	1	RSウイルス肺炎	7	下腿蜂巣炎	1
サルモネラ腸炎	1	インフルエンザA型	1	13 筋骨格系及び結合組織の疾患	9
ヒトメタニューモウイルス感染症	2	インフルエンザ肺炎	2	川崎病	7
急性腸炎	1	ウイルス性肺炎	3	不全型川崎病	2
細菌感染症	3	ヒトメタニューモウイルス気管支炎	1	14 泌尿路生殖器系の疾患	7
突発性発疹症	2	ヒトメタニューモウイルス肺炎	4	右慢性腎盂腎炎	1
溶連菌感染症	1	マイコプラズマ気管支炎	2	急性腎盂腎炎	1
03 血液及び造血系の疾患並びに免疫機構の障害	1	マイコプラズマ肺炎	7	急性巣状細菌性腎炎	2
左肩胛部化膿性リンパ節炎	1	気管支肺炎	4	尿路感染症	2
04 内分泌、栄養及び代謝疾患	3	気管支喘息	5	複雑性尿路感染症	1
成長ホルモン分泌不全性低身長症の疑い	1	急性気管支炎	1	16 周産期に発生した病態	8
低血糖	1	急性上気道炎	1	新生児感染症	1
低身長症	1	急性鼻咽頭炎	2	赤血球増加症による新生児黄疸	4
06 神経系の疾患	3	細菌性肺炎	4	哺乳不全	3
てんかん	1	小児肺炎	2	18 症状等で他に分類されないもの	3
交感神経緊張亢進急性増悪	2	小児喘息性気管支炎	1	熱性痙攣	3
09 循環器系の疾患	1	喘息性気管支炎	3	19 損傷、中毒及びその他の外因の影響	1
三尖弁閉鎖不全症	1			牛乳アレルギー	1
				総計	124